

堤哲朗監督を偲び

中嶋 康勝 (朝日映画／プロデューサー)

1981年6月、信じられないほどの朗報が飛び込んできた。

堤哲朗監督による自主製作作品「木組・銅葺・漆喰壁 - 愛染院本堂建立記録 -」が、文部省特選に選ばれたとの連絡である。

私はこの作品にはプロデューサーとしてスタッフに参加していた。この時、堤さんは、大成建設・広報部に勤務し、主にPR映画の企画・製作管理に携わる一方、映画作家として、自ら建築土木関係の記録・技術紹介映画に情熱を燃やしていた。そして、私たちからすれば、発注者側の人でもあった。映画のレベルはいうまでもなく監督の力量の素晴らしさはいつも目をみはるものを持っていた。堤さんがよく言われていたことは、「僕は依頼者でもあり、また監督でもある。複雑なのだ…」私が大成建設から発注を受けた何本かの作品を、監督として堤哲朗さんに頼んだとき、カメラマン、照明などのスタッフが一律に渋い顔をする。あるカメラマンは、「堤さんはスポンサーだろ、プロの監督でないのでは、やりにくいよな…」と。その時私はいつも「違うよ、プロだ、アマだと線引きをするのではなく、その人の持っている



大成建設・広報部
時代の堤哲朗氏(左)
(提供：今泉信二氏)

情熱と力量そしてセンスだ」と激論をかわす。堤さんは、映画製作は、依頼者と製作者の共同作業だと。依頼者は、長年の経験を持っているスタッフのノウハウやプラスアルファに期待するという、監督としての立場、発注者としての立場、この二つの立場を持つ堤哲朗監督、本人が複雑だと言った言葉がよくわかる。

文部省特選、この朗報は本人はもとより私自身、心から喜んだ。プロだと言われる監督でもなかなかもらえない賞。以後、私のスタッフも、監督の力量を高く評価するようになった。もうこれからは監督と呼ぼうと話合った。監督作品約50本、科学技術庁長官賞、教育映画コンクール優秀賞、日本産業映画ビデオ祭通産大臣賞など、多くの賞を受賞した。

いつも映画の事が頭から離れない監督、平成5年フリーとして新たな道を選んだ。晩年病に倒れた時、奥様がこう話をされていた。「堤は、医者に行っても、自分の身体のことよりも、映画の話をして先生にして帰ってきてしまう。これでは、手遅れになりますよね…」。

2004年6月、帰らぬ人となった(享年71歳)。

ある時は発注者の立場で意見を話し、ある時は監督として作品製作に情熱を燃やした監督・堤哲朗。

本当に惜しい人を亡くした。

●●●●●●●●●●編集後記●●●●●●●●●●

こつこつと積み上げる大切さを、大須賀副会長が継続する映文連アメリカツアーに参加して実感。海外視察ツアーという、長年の地道な活動が、海外の映像関係者の信頼を勝ち得ています。

さて、映文連は新たな計画を立ち上げます。若い世代にこの業界をもっと魅力的に感じてもらえるようなWEBあり、上映会ありの企画です。会員同士が交流し、業界の問題点を共有し閉塞感を打ち破り、新たなネットワーク作りの出来る環境を、と考えています。皆様の参加をおまちしております。

なお、映文連の事務局は、9月22日(水)に視聴覚ビル10階から9階へ移転しました。住所・電話・FAX番号はそのままです。

【訂正】会報 vol.42Voice の執筆者名・奥村忠美子さんは「奥村恵美子」さんの誤りでした。お詫びして訂正いたします。

『社団法人 映像文化製作者連盟 会報』2004・秋号

発行日 2004年10月1日
発行 社団法人 映像文化製作者連盟
〒105-0001
東京都港区虎ノ門1-17-1 視聴覚ビル
TEL.03-3501-0236 FAX.03-3501-0238
<http://www.eibunren.or.jp/>
編集協力 有限会社 ユニ通信社